

提言

岡崎MICEを中核とした都市プロモーション
～求められるファシリティと機能～

平成24年7月24日

京都商工会議所
観光産業特別委員会

はじめに

この提言を行うに至った起点は、平成22年9月に京都商工会議所・観光産業特別委員会（南 隆明委員長）において取りまとめた「京都観光 10 年後への構造転換に向けての重点施策について（提言）」にあります。

先の提言では、観光客のニーズの多様化、東アジア諸国を中心とした外国人観光客の急増など、京都の観光振興における大きな変化のうねりに対応するため、より経済効果の高い観光振興を図る必要があるとの観点から、京都観光の構造転換を図るMICE需要の取り込みを重点施策の一つとして採りあげさせていただきました。また、平成24年2月には、今般の京都会館再整備を、京都のMICE環境を高める絶好のチャンスととらえ、コンベンション機能の充実を京都市に要望したところです。

今回の提言は、東京や横浜など他都市に比べて立ち遅れている京都のMICE環境を高めるため、京都会館をはじめとした諸施設がコンベンションセンターとして機能するために何が必要か、観光産業特別委員会のもとにMICE推進小委員会を設けて、そのファシリティを具体的に検討し、取りまとめたものであります。

岡崎地域は、多くの文化・観光・交流施設や豊富な文化財及び寺社が集積しており、質の高いMICEを開催できる点で、世界でも比類のないポテンシャルを持っています。京都のMICE拠点となる新しいユニークベニューとして、岡崎地域を世界に発信することにより、素晴らしい競争力のあるMICEのデスティネーションになれるものと確信しております。そのためには、国内外のMICE需要を見据え、限られた都市資源をいかに活用していくか、近代産業の草創期に岡崎で行われた革新的な事業に思いをはせ、いまこそ知恵を生かすべきと考えます。

「京都観光 10 年後への構造転換に向けての重点施策について（提言）」で目標とした10年後に、MICEが京都の知的集約型産業として根付き、その拠点として岡崎MICEが主導的な役割を担っていることを願ってやみません。

京都商工会議所 観光産業特別委員会
MICE推進小委員会 委員長 田中誠二

目次

序) 岡崎地域で MICE を推進する意義	3
1. MICE 業界の潮流と岡崎地域としての対応	4
1-1. 内外動向に見る MICE 業界の潮流	4
1-2. 業界潮流を見据えての岡崎地域としての対応	6
2. 岡崎地域の MICE ファシリティのあり方	8
2-1. 岡崎 MICE の 3 つのアクション	8
2-2. 各施設の統合的利用の基本的考え方	8
2-3. 岡崎の中核施設に求められる機能	9
2-4. 岡崎 MICE を推進する協同体制	10
(参考) 観光産業特別委員会 MICE 推進委員会 概要	11

序) 岡崎地域でMICEを推進する意義

岡崎は国際文化観光都市・京都の顔ともいえる重要な地域である。

明治初期の京都は首都機能の東京移転等により衰退の危機に見舞われた。しかしながら内外から最新の知見を集め、琵琶湖疏水、水力発電、市街電車など、前例のない事業に果敢に挑戦してきた。その舞台となった岡崎において、1895年に第4回内国勸業博覧会が開催され、これを契機に京都は、大きな経済発展を果たしていった。

このように岡崎地域は、革新的な事業を結実させ、京都の未来を切り開く水先案内人としての役割を果たしてきた。

そして、琵琶湖疏水や水力発電所など、かつての革新的事業はいまなお活用されている。地域内には、京都会館や美術館など多くの文化施設が集積し、風光明媚な景色にも恵まれ、周囲には歴史ある寺社仏閣も多数ある。

2011年5月に策定された京都市の「岡崎地域活性化ビジョン」では、50年後、100年後を見据えた、岡崎地域の5つの「将来像」が掲げられている。そのひとつが「交流する観光・MICE拠点」であり、この実現へむけた「MICE拠点としての機能強化」という方策も示されている。

MICEは観光のひとつの形態であると理解されがちであるが、内外から多くの人々を集め、実のある交流を通じて、文化や産業をはじめ、幅広い分野で地域に活力をもたらす知識集約型産業である。新たな価値を生み出すには、より多くの人や知識を集めるとともに、人々の精神に潤いや刺激をもたらす良質な環境、すなわち価値創造の文脈を形成することが必要になる。岡崎地域には、その文脈を形成してきた歴史や風土がある。

グローバル化や産業構造の転換などにより、知識や人々の交流の重要性がますます高くなるなかで、MICEは次代を拓くリーディング産業のひとつになる。「岡崎地域活性化ビジョン」に掲げられた「交流する観光・MICE拠点」への取り組みを着実に推進すべきである。

1. MICE 業界の潮流と岡崎地域としての対応

1-1. 内外動向に見る MICE 業界の潮流

MICE は明確な目的を持ったビジネスであるために、費用対効果を最大化することが要求されるが、その要求水準は市場競争のなかで、さらに高まりつつある。内外の業界動向からは、以下のような潮流を指摘できる。

①施設の大型化・複合化

MICE の最大の目的が新たな知見やネットワークを得ることであり、その可能性を高めるには、分母となる参加者や出展者の総数を大きくすることが重要な条件となる。そのため世界主要都市の会議場や展示場は、いずれも大型化する傾向にあり、現在では、国際会議の収容人員が5千人以上であることが世界標準とされている。同時に、分科会などを開催するための中小の会議室も相当数を確保することが必要だと言われている。

さらに、開催される催しの多様化も進みつつあり、それにつれて施設の大型化、複合化も進みつつある。主催者の要請に応えるために、会議場には展示場機能を付加、展示場には会議場機能を付加、その他、ホテルや集客力のある商業施設、文化施設などと複合化する例も多くなってきた。

②コミュニケーション関連技術の高度化と基本インフラの確保

1990年代半ばまで、プレゼンテーションはスライドや OHP で行われるのが一般的であったが、いまやパソコンでのプレゼンテーション、ネットワークを通じた意見交換などは日常化し、無線 LAN 環境の整備も進みつつある。近年は、IC タグによる参加者の関心度（ブースへの立ち寄り履歴など）を評価するシステムが利用されるなど、MICE で利用される情報通信技術は、さらに高度化・高速化してきた。さらなる技術進歩と低廉化は必至で、例えば、ハイビジョン映像の普及など、利用される情報通信技術の秒進分歩は今後も継続していくと考えられる。ただし変化が早いだけに、新しい技術の導入時期を見極めるのは難しい側面もある。

したがって、情報通信の基本インフラを前もって整備し、機器類は技術進歩に合わせて、時々調達していくことが現実的である。

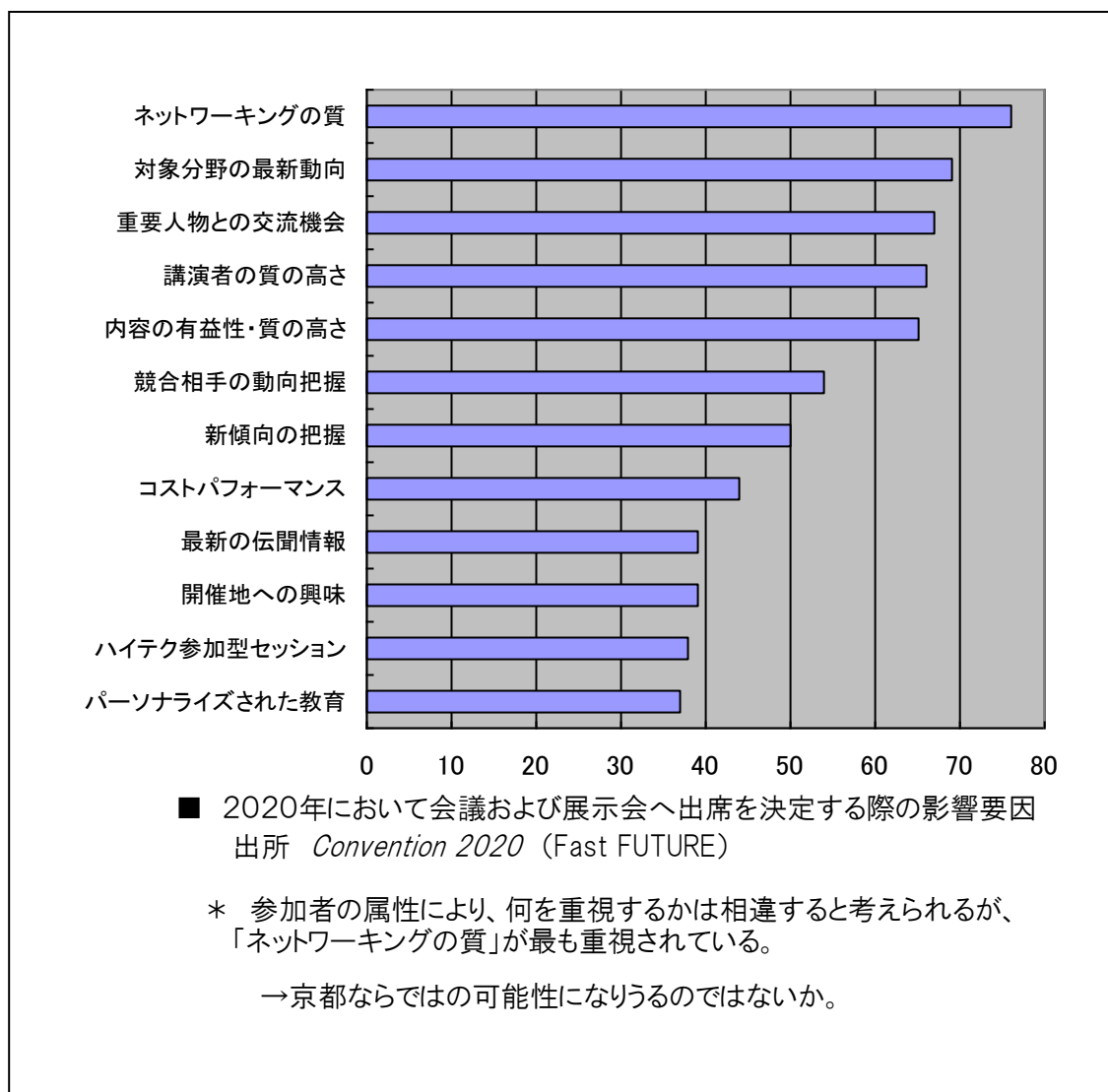
③具体的に情報交換を行うスペースの確保

展示会では、参加者への実践的ソリューションを提示する技術セミナー（付帯セミナー）が開催される機会が多くなり、大規模会議においては総論を報告・発表した後に、具体的なテーマに絞った会議が開かれることが増えつつある。適切なテーマ設定を行えば、特定の関心を持った参加者集団に対

して、一定の情報を効率的に提供できるため、例えば、展示施設側が独自にセミナー室を新設したり、近隣施設との連携を通じて会議室を確保するというケースが増える傾向にある。東京ビッグサイトでは、国際展示場正門駅を挟んだ反対側の東京ファッションタウンビルを一体運営している。

④先鋭的取り組みへのアクセス

これまでアフターコンベンションのプログラムとして、主に地域の伝統行事や自然など、異文化体験などが実施されてきた。非日常的な場所において、新たな発想や着想を得ることを目的とするものであるが、今後は、実地での体験ないし接触対象となる領域は、地域固有の資源などだけではなく、先鋭的でユニークな取り組みにまで広がっていくと考えられる。例えば、韓国済州島では大規模なスマートグリッドの実証実験を進めながら、関連施設を MICE プログラムのひとつに位置づけており、また EU では、再生可能エネルギーによってエネルギー自給をめざす島々でエネルギーの国際会議が開かれることが多く見受けられる。



1-2. 業界潮流を見据えての岡崎地域としての対応

①既存施設を最大限に活用した街区としての MICE

京都は三方を山に囲まれ、物理的な開発余地も少ないことから、新規建設などによる施設の大型化や複合化が望ましいことであったとしても、それを短期・中期に実施することは現実的でない。そこで、国立京都国際会館とグランドプリンスホテルが施設間を光ファイバーで結ぶことなどで、施設間の連携をはかっているように、岡崎地区内の複数の既存施設を統合的に利用できるようにし、近隣の街区全体として会議施設の規模や数量、複合的な機能を確保していくべきと考えられる。

一方、会議参加者がリラックスするために、また同伴者に観光機会を提供するという点で、周辺に魅力的な場所があり、歩行での回遊性があるということは、MICE の成功を側面から支える大きな条件になる。自然と景観に恵まれたコンパクトな地区のなかに、ユニークベニューが多数あることは、岡崎地域ならではの特徴である。したがって、街区を MICE ゾーンとみなし、既存施設を統合的に利用でき、また、街区全体でホスピタリティ(おもてなし)を提供できれば、それは他では持ちえない強みになる(すでに、日本人の丁寧さ、親切さは外国人観光客にとって大きな魅力になっている)。

* 一般に、学会や国際会議などでは、雨に濡れずに会場間を移動できることが非常に重要な条件とされる。ただし、インターネット検索大手 G 社のように、地方の小さな町を開催地とし、町全体を活用し、地元の人々と交流しながら各種ミーティングを開催するケースもある。

②フレキシビリティの確保

それぞれの施設の目的や機能などが異なっており、また多様な個性が立地しているからこそ、楽しめる街区になる。しかしながら MICE の開催規模が大規模化し、開催される催しも多様化していることから、それぞれの施設にハード面のフレキシビリティの確保、また運用面でも一定のフレキシビリティを持たせ、支障のない範囲で、多くの用途で利用ができるようにすることが望まれる。

③最新のコミュニケーション環境の確保

MICE の最大の目的はコミュニケーションであることから、各施設において、無線LAN環境の整備など、高速インターネットに簡単に接続でき、データや映像などを円滑に扱えるよう最新の情報通信環境を整えることを基本とすべきである。また、各施設の統合的な利用を可能にするには、施設間での円滑な情報通信を可能とするネットワークを確保すること、最新の機器類が導入できる可能性を確保しておくことが必要不可欠である。

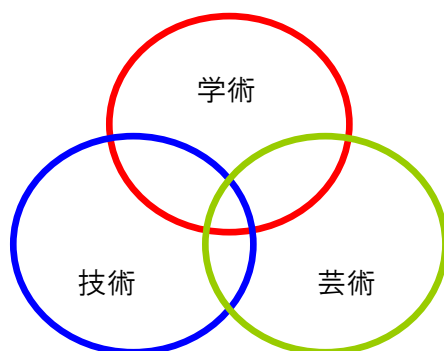
国内会議だけでなく今後増加させていくべき国際的な会議やイベントに対応できることも念頭におき、同時通訳が実施できる環境も整えておくべきである。

④具体的なソリューションを提供する岡崎 MICE 「三術の調和（コンセプト例）」

日本が繁栄し、世界から敬愛されるためには、「学術、技術、芸術の三術が調和した文化立国」を目指すべきと論じたのは故・梅棹忠夫氏であるが、日本のなかで最大の可能性を持つ場所は京都である。長い歴史と芸術・文化があり、多数の大学が集積し、産業の多様性がある京都には、まさに三術の厚みがある。この三術は新たな知見の源泉となり、新たなソリューションを創りだす原動となる。すなわち京都は MICE の適地であり、その象徴的な地域が岡崎である。

岡崎地域には、京都市美術館など複数の文化施設があり、芸術の殿堂となる京都会館がある。伝統技術を継承し、新たな技術を引き出す場所としての みよこめっせ(京都市勧業館)がある。そして至近な距離には、日本の学術を代表する京都大学があり、哲学の道など、思索を深めるには絶好の自然環境がある。

もちろん MICE 開催においては、会議室の数量や通信環境の整備など、知見やソリューションを伝えるための物理的環境は必要である。ただし物理的環境での差別化は、抜きつ抜かれつの競争となり、際限がない。したがって「三術の調和」といったコンセプトを明確化し、MICE の推進を進めるべきだと考えられる。「三術の調和」とは、すなわち産学公や市民など地域関係者の効果的な連携であり、それが強力に実現できれば、まさに格好の MICE 開催地としての地位を得ることができる。



■ 三術の調和 : 京都 MICE の可能性

国内外の世界の MICE の潮流に照らし合わせてみても、岡崎地域を京都 MICE の中核地域と位置づけ、その推進をはかることは、きわめて合理性が高いうえ、今後の都市発展の観点からも重要なポイントになる。日本の MICE を牽引するという点で、国益にかない、適切な取り組みがなされない場合には、多くの機会ロスが発生させる恐れもある。

2. 岡崎地域の MICE ファシリティのあり方

2-1. 岡崎 MICE の 3 つのアクション

①岡崎が舞台の MICE 「魅力あふれる街を舞台に MICE が開催できます」

魅力あふれる岡崎地域に立地する個性的な施設を、MICE 主催者のニーズに応じて、統合的に利用できる万全の体制を用意し、街全体として参加者を歓迎し、もてなします。

②最高の顧客満足度の実現 「最高の感動を提供します」

京都会館とみやこめッセをはじめとした、地域内の複数の会場施設をシームレスに予約・利用できるようにし、統一性のあるサイン計画など、単一施設での開催と同等以上の利便性を実現するとともに、単一施設では実現しえないバラエティ豊かなサービスを提供して最高の顧客満足を実現します。

③三術の調和をめざす MICE 「未来への確かな出会いをもたらす MICE」

思索を育むにふさわしい山紫水明の環境のなかで、地域内の産業技術の拠点、芸術の殿堂、文化施設などを生かし、伝統文化から最先端にいたるまでの京都の三術を結集させ、世界中の三術が集い交流できる場をつくります。

2-2. 各施設の統合的利用の基本的考え方

①幅広い分野への対応

岡崎地域は京都を代表する顔であり、多種多様な人が集まって、幅広い交流を展開されることが望ましい。したがって、そこで開催される催しも、特定のジャンルに限定せず、音楽、演劇、舞台、美術、各種発表会、展示会、国際会議など幅広い分野を対象にすべきである。そのためには、各施設が中心ターゲットとする催しの開催に注力しながらも、多様な分野の催しに対応できるようにすべきである。

②統合的利用による質の高い MICE プログラムの実施

単独の施設で十分な会議室など確保できないことが想定される場合には、複数施設で開催できるようにすべきである。例えば、京都会館で企業ミーティングの総会、みやこめッセで展示会や分科会を開催し、さらには京都市国際交流会館や美術館でレセプションを開催するというパターンなどが想定できる。それぞれの施設の特徴を最大限に生かして、一連の会合を開くことができれば、参加者には非常に大きな感動、満足度を提供できる。

③統合利用のための窓口一本化

岡崎地域内の施設の統合的利用を可能にするためには、各施設間での情報交換を適切に行ったうえで、それぞれの意向を施設の利用状況を調整しながら、MICE 主催者に対して、予約や各種手配などの情報やサービスをワンストップで提供できる窓口を設けることが必要となる。ただし、その前提として、岡崎地域としての協同体制をつくること、地域としてのプロモーションやマーケティングを実施することなどが必要になる。

2-3. 岡崎の中核施設(京都会館・みやこめっせ)に求められる機能

①国際会議が開催できる仕様の確保

京都市内の会議場の最大収容人員は、国立京都国際会館メインホールの 1,840 人で、他の主要都市に比較して、一定規模以上の会議室が明らかに少ないことから、京都会館の第1、第2ホールでも国際会議を開催できる仕様を備えておくべきである。具体的には以下の対応が求められるが、主要用途である音楽ホールとしての機能を損なわずに確保できると考えられる。

- 1) 第1、第2ホールを快適で一体性のある会議室として利用できる設備環境(照度を確保するための照明、書類などを置くためのサイドテーブル、音楽ホールの残響音を解消するための音響制御装置など)の整備。
- 2) 最新の情報通信機器により、効果的なプレゼンテーションが行え、京都会館内の複数会場や近隣施設と円滑なコミュニケーションが行えるインフラ、ならび映像や音声などを効果的に配信し、記録できる設備の確保。
- 3) 報道関係者やプレスへの対応を含めて、持ち込み映像機器等の設置については、あらかじめ場所等を指定し、可動式イスの設置などにより利便性を確保。
- 4) 3~4カ国程度の同時通訳システムの導入を可能とする空間の確保(舞台袖スペース、客席一部を着脱可能タイプにするなどの工夫)。
- 5) 分科会開催のための一定数以上の中小会議室の設置。
- 6) 相応のレセプションスペースの確保(京都の持つ食の多様性を提供できるケータリングの利用により、ホワイエや屋外などでもレセプションが開催できるような工夫)。

* 国連基準の国際会議では公用語は6カ国語で、これに開催地の言語、スピーカーの言語を加えると、8カ国となり、大規模会議施設では、8カ国の同時通訳に対応しているところが多い。もちろん京都会館においても、最大8カ国に対応できることが望ましいが、現実的には3~4カ国語に対応できることが求められる。

②情報発信・交流機能の強化

みやこめっせは産業拠点として位置付けられていることから、伝統技術とともに最先端の技術があること、そして多様性に富んだ産業連関があることなど、京都産業の特徴や厚みを展示し、さらに強く対外発信して、交流の輪を広げていくような施設にすべきである。

- 1) 導入部や案内サインなどの改善、あるいは配置の見直しなどにより、京都伝統産業ふれあい館へのアクセスを大幅に向上させ、集客・交流機能を強化する。
- 2) 京都の最先端の技術などの展示スペースも確保することで、京都産業の総合性や奥行きもアピールできるようにする。

③MICE プログラムへの柔軟な対応

MICEには、人々の交流を通じて、文化にも活力を与えるという側面もあることから、文化施設なども柔軟に対応することが望まれる。岡崎地区内には、美術館などユニークベニューが相当数存在し、そこで特別なプログラムを考案、実施することも可能と考えられる。例えば、閉館後の美術館において、カクテルパーティと合わせた絵画鑑賞、カフェを貸しきって、音楽家を手配し生演奏を聞きながらのパーティなどは、すでに先行事例がある。ある種のサプライズとしての魅力を提供するだけでなく、多様な催しを開催することで施設の稼働率向上にも結びつくという点でも一定の意義がある。

④中核となる施設のコミュニケーション環境の確保

京都会館、みやこめっせ、京都市国際交流会館が岡崎 MICE を推進する中核的役割を担うことから、各施設の統合的な利用を可能にするため、データや映像などを円滑に扱えるよう最新の情報通信環境を整えるなど、施設間でのスムーズな情報通信を可能とするネットワークの確保が不可欠である。同時に今後の各施設の再整備等を念頭に、配管の設置など情報インフラ構築の導入余地を残しておくことが、将来の利便性向上と敷設コストの低減を図るうえで必要と考える。

2-4. 岡崎 MICE を推進する協同体制

京都会館やみやこめっせなど、岡崎地域に立地する施設は、それぞれが管理主体や設立目的が異なり、また、実務レベルでは予約方法や料金体系も異なっており、現状では、統合的な利用はほぼ不可能な状況にある。理想的には、すべての施設の管理主体を一元化できることが望まれるが、現実的でない。したがって、まず求められることは、各施設の意向などを調整し、MICE 主催者に取り次ぐ、中間的組織の確保であり、これまでの経緯を踏まえると、その役割は京都文化交流コンベンションビューローが担うべきと考えられる。

詳細は別途、同ビューローが中心となって検討すべきであるが、関係者での情報交換、問題意識の共有化を経て、岡崎地域として MICE のビジョンやマーケティングのあり方を明確化したうえで、効果的なプロモーションや受注を行える仕組みや計画などを今後、具体化していくべきと考えられる。

観光産業特別委員会 MICE 推進小委員会 概要

1. 目的

人が交流し、知を触発することを目的とした MICE (Meeting, Incentive tour, Convention, Event/Exhibition)は、地域産業を牽引するための重要な都市活動のひとつである。MICEに関わる国際競争が激しくなるなか、京都は質の高いMICEを開催するという点では、高い潜在性を持つ。今後、京都における MICE を推進するにあたり、MICE 環境を高める上で欠かすことのできないハード面の機能についてさらに掘り下げた検討を行うことを目的に、京都商工会議所観光産業特別委員会のもとに専門組織として、MICE 推進小委員会を設置。

2. メンバー(敬称略・順不同)

委員長	田中誠二	株式会社キャリアール・インターナショナル 代表取締役社長
委員	石原義清	株式会社俵屋吉富 代表取締役社長
委員	秋野 稔	株式会社京都銀行 法人部 観光支援室長
委員	河田邦博	西日本旅客鉄道株式会社 京都交流推進委員会事務局次長
顧問	南 隆明	京都駅ビル開発株式会社相談役
オブザーバー	赤星周平	公益財団法人京都文化交流コンベンションビューロー 国際観光コンベンション部長
アドバイザー	太田正隆	株式会社JTB総合研究所調査コンサルティングチーム主任研究員
事務局	中野善浩	株式会社ヒューマンルネッサンス研究所 研究部 主任研究員 京都商工会議所 産業振興部

3. 活動内容

第1回委員会

開催日 平成 24 年 6 月 13 日(水)

場 所 国立京都国際会館

内 容 講演

テーマ:「京都国際会館で考える MICE ～現状(設備)、課題、展望～」

講 師:公益財団法人国立京都国際会館 施設部 施設管理課長 浜秋明博 氏

視察 一京都国際会館内一

第2回委員会

開催日 平成 24 年 6 月 18 日(月)

視察先 東京国際フォーラム(株式会社東京国際フォーラム)

パシフィコ横浜(株式会社横浜平和国際会議)

内 容 施設概要及び主催者ニーズの把握、施設見学

第3回委員会

開催日 平成 24 年7月2日(月)

場 所 京都商工会議所 役員室

内 容 講演

テーマ:「京都 MICE のファシリティ強化の方向性」

講 師:株式会社JTB総合研究所 調査コンサルティングチーム

主任研究員 太田正隆 氏

意見交換

第4回委員会

開催日 平成 24 年7月9日(月)

場 所 京都商工会議所 第2会議室

内 容 報告 京都会館再整備事業

協議 提言(案)「岡崎 MICE を核とした都市プロモーション

～求められるファシリティと機能～(仮称)」

4. これまでの経緯

平成 21 年4月 「京都観光 ― 10 年後へ向けての構造転換(中間報告)」

平成 22 年9月 「京都観光 10 年後の構造転換に向けて重要施策の提言」

1. 宿泊客 2,000 万人実現のための施策
2. 東アジア交流時代に向けての外国人観光客受け入れ推進策
3. MICE 推進策

平成 24 年2月 「京都 MICE の展開策について」